

キーワード10 かけがえのない存在

入学式も終わり、子供たちは、毎日元気に学校生活を送っていた。1年1組の担任U教諭は、初めて1年生を受けもつということで張り切っていた。1週間が過ぎた頃、靴箱の前でU教諭を見上げてVさんがもじもじしている。

U教諭：「どうしたの？Vさん。」

U教諭はやさしく声をかけた。

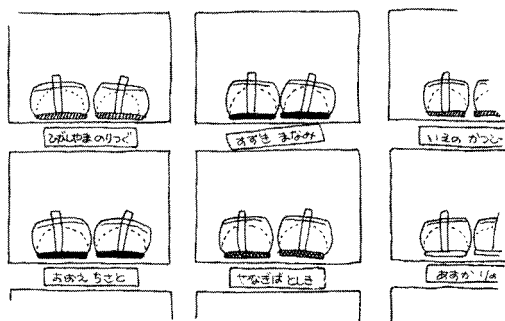
Vさん：「あのね、あの靴箱の私の名前…。」

U教諭：「靴箱の名前がどうかしたの。」

Vさん：「私のだけ曲がって付いている…。ねえ、どうして私のだけ？」

Vさんは、そう言うと、走って行ってしまった。

U教諭は、「そういえば準備作業のとき時間に追われ、何枚か雑に張ってしまった。」と思い当たった。



この事例は、学級全体にとらわれて、個々の子供たちの存在に目が向いていなかったために起こったものです。

子供は「1分の1」

事例のように、教師は全体として子供を見がちです。しかし、その子自身は一人であり、「1分の1」の存在として見るのが、違った個性をもった一人一人の子供を生かすことになります。「一人一人の名前を正しく呼んでいるか。」「全員の作品が掲示されているか。」など、一人一人を尊重する姿勢が大切です。

一人一人を大切にすることの難しさ

集団に目が向いていると、一人の子供の存在を見落とすことになりがちです。また、一人の子供だけに目が向いていると他の子供をないがしろにするという批判を受け、その兼ね合いに苦慮します。

集団は、一人一人のかけがえのない子供によって構成されていることを心に刻み、「自分は大切にされている。」と、どの子も実感できる指導を心がけることが大切です。

一人一人を大切にすること

児童の権利に関する宣言（1959年）には、「すべての児童は、いかなる例外もなく…差別を受けることなく、これらの権利を与えられなければならない。」と述べられています。これは、子供はすべて、一個の人間として大切にされることを保障するものです。